

[研究ノート]

経済学における「自然」概念の再解釈 ——ポリティカル・エコノミーから現代経済学へ——

喜 治 都

〈要 約〉

経済学の教えによると、自由な経済活動と自由な競争は、人々の利益の追求というインセンティブを原動力として、希少な資源を効率的に配分しながら経済の発展・成長を促すものである。20世紀の最後の10年間で、それまでの冷戦によって分断されていた世界経済は一気にグローバル経済として語られるようになり、グローバル経済の成長のためには、自由な経済活動と自由な競争がますます奨励されてきた。物質的には確かに生産量は増大し世界経済の成長が見られるが、資源・食糧問題や環境問題、それに貧困や格差といった影の部分に目を向けると、世界は経済学が理想とする経済状態へと向かっているのかどうかさえも判断できないほど、将来は不確実さを増してきている。

実は250年も前に、この世が不確実なものであることを認識し、また人間の愚かさや不誠実さによって思わぬ事態が生じることも承知したうえで、経済のしくみを解明しようとしたのが、アダム・スミスなのである。本稿では、経済学でいう一般法則や教義がこれまで我々に与えてきたさまざまな影響について、スミスの時代に普及していった「自然」概念に遡って考察する。

まず1節では、18世紀に誕生したポリティカル・エコノミーが自然思想の影響を受けて形成されていくプロセスと、そこで生まれた「自然」概念、つまり理想的経済状態としての自然状態について見ていく。2節では、経済用語としてのスミスの自然価格および自然率の理論を始まりとして、現代経済学で受け継がれている「自然」概念として、ヴィクセルの自然利子率およびフリードマンの自然失業率を、スミスとの比較において見ていく。

3節では、ポリティカル・エコノミーから現代経済学に至るまで、経済学の教義とされている「見えざる手」や自由競争、および自由放任などが、今日のグローバル経済においてどのように解釈されているかを検討する。最後に、理論と現実から実際の経済問題をどう認識していけばよいか、すなわち、経済システムはいわゆる理想的な自然状態へ向かっているのか、そもそも理想的な自然状態とはいかなるもので、果たしてそれが人間にとって「善き」状態なのか、といった問題を指摘し、スミスの時代がそうであったように、今一度ポリティカル・エコノミーの役割や哲学の助けが経済学において期待されていることを述べて終わりとする。

キーワード：ポリティカル・エコノミー、自然率、見えざる手、競争、レッセ・フェール

はじめに

21世紀は、激動の世紀となることを予感させるような幕開けとなった。9.11の悲劇は、この世が決して安全ではなく信頼によって調和がとれているのでもなく、不確実性と不安に満ちていることを知らしめた。資本市場が活況を呈している束の間、貨幣や得体の知れない金融資産は無限に増殖可能

な富として人々を駆り立てた。ほんの一握りの幸運な人々のところにお金と高級品とがますます集中し、それなりの恩恵に与っている人たちもいれば、他方で、経済成長など全く別世界のここのように苦しく貧しい生活を強いられている人たちは日々の生活で精一杯だ。そして、人知の及ばない突如の金融パニックは、最高の英知と科学技術の賜物であるはずの世界の金融・経済システムがいかに脆弱であるかを露呈し、100年に一度とも言われた世界的金融危機が、21世紀の最初の10年を迎える間もなく世界を襲った。

経済学が教えるところによると、自由な経済活動と自由な競争は、人々の利益の追求というインセンティブを原動力として、希少な資源を効率的に配分しながら経済の発展・成長を促すものである。20世紀の最後の10年間で、それまでの冷戦によって分断されていた世界経済は一気にひとつのまとまり、すなわちグローバル経済として語られるようになった。この一つになったグローバル経済の成長のためには、当然、自由な経済活動と自由な競争がますます奨励され、実際にそのような政策が実施されてきた。物質的には確かに生産量は増大し、数字の上では世界経済の成長が見られるが、ひとたび影の部分に目を向けると、世界は経済学が理想とする経済状態へと向かっているのかどうかさえも判断できないほど、将来は不確実さを増してきている。

実は250年も前に、この世がこうした不安で不確実なものであることを認識し、また人間の愚かさや不誠実さによって思わぬ事態が生じることも承知したうえで、経済のしくみを解明しようとしたのが、アダム・スミスなのである。

本稿では、今日のグローバル経済の急速な発展過程において顕在化している不平等や貧困といった問題を、現実の問題として考えるためのヒントとして、経済学でいう一般法則や教義がこれまで我々に与えてきたさまざまな影響について、スミスの時代に普及していった「自然」概念に遡って考察する。

まず1節では、18世紀に誕生したポリティカル・エコノミーが自然思想の影響を受けて形成されるプロセスと、そこで生まれた「自然」概念、つまり理想的経済状態としての自然状態について見ていく。2節では、経済用語としてのスミスの自然価格および自然率の理論を始まりとして、現代経済学で受け継がれている「自然」概念として、ヴィクセルの自然利子率およびフリードマンの自然失業率を、スミスとの比較において見ていく。

3節では、ポリティカル・エコノミーから現代経済学に至るまで、経済学の教義とされている「見えざる手」や自由競争、および自由放任などが、今日のグローバル経済においてどのように解釈されているかを検討し、最後に、理論と現実から実際の経済問題をどう認識していけばよいか、スミスの時代がそうであったように、今一度ポリティカル・エコノミーの役割や哲学の助けが経済学において期待されていることを述べてまとめとする。

1 経済学における「自然」概念の起源

1.1 ポリティカル・エコノミーの形成

現代経済学の起源である「ポリティカル・エコノミー (political economy)」という言葉は、17世紀のフランスに始まり、その後イギリスにおいてジェームズ・スチュアート (James Stuart) が著書のタイトルとして初めて用いたのが18世紀半ば過ぎのことであり、さらにジョン・スチュアート・ミル (J. S. Mill) によって1848年、今で言う「経済学」という学問分野の書物のタイトル (『経済学原理』 (Principle of Political Economy)) として使用された¹⁾。17世紀後半から18世紀はヨーロッパで啓蒙思想が普及していった時代で、ポリティカル・エコノミーも、自然法 (natural law) もしくは自然誌 (博物学) (natural history) が専門家のみならず大衆の間にも普及していく中でその思想的影響を受ける

ことになる。Cardoso [2004] はポリティカル・エコノミーの形成が自然法や自然誌（博物学）の普及過程と補完的であったことを強調し、それは元来その方法論や知識形成のプロセスからして政治哲学（political philosophy）や道徳哲学（moral philosophy）という哲学的思想へのアプローチに基づいていると述べている²⁾。道徳哲学者・経済学者として自然法思想の影響を受けたアダム・スミス（Adam Smith）の経済思想が、事物の「自然的」な捉え方の上に形成されていることは言うまでもない。そこで、スミスの「自然」概念を整理する前に、まずは科学としてのポリティカル・エコノミーの起源について見てみよう³⁾。

Cardoso [2004] は科学としてのポリティカル・エコノミーの位置づけについて、まず社会科学との関係を自然法から導き、次に自然科学との関係を自然誌から導くことで、ポリティカル・エコノミー形成の二つの経路を区別する。前者においては、人間の自然な権利や自然的自由に見られる人間の本性（human nature）に固有のものとしての自然法が普遍的に受け入れられ、この流れにおいて人間や社会全体のしくみについての探究が、社会科学としてのポリティカル・エコノミーの出現に至ったとする。自然法（哲）学においては、自然人（natural man）が分析の対象の中心にあり、その経済的側面を独立させることで人間の生存のための生産や交換、および複雑な経済的相互依存関係を対象にするとともに、さらには個人の利益を社会全体の利益につなげるという社会的調和のプロセス、すなわち社会秩序の問題への取り組みがポリティカル・エコノミーに課されたというわけである。

これに対して自然科学との関係、すなわち自然的秩序（natural order）の物質的機能を担う科学の発展との関係においては、自然誌の普及が重要な役割を果たしている。自然法（哲）学によって人間の本性が探究されるようになると、人間をとりまく自然なる世界（natural world）についてのさまざまな現象への知的関心が、専門家だけでなく、俗世間一般の教養人を育てることとなり、新しい知識の創造の広がりや自然誌への関心として共有され、人々を魅了していった。18世紀の後半には自然誌が人間および社会を改善・改良していくための知識として、現実の生活・人生（life）に応用されるようになり、自然的秩序（natural order）と経済的秩序（economic order）は密接な関係をもつものとして認識されるようになる。Cardosoは、こうした過程において、秩序を制御するための政治的・制度的（political）側面の重要性が、自然思想家らの業績によって得られたことを見落としてはならないと指摘する。ここに現代経済学の起源としてのポリティカル・エコノミーの誕生を見ることができる。さらに、自然科学の分野におけるポリティカル・エコノミーは経済のしくみ、秩序のメカニズムをより科学的に探究すべく、均衡・安定・制約といった概念を取り込んでいくようになる。重農主義者は自然エネルギーを地球からのギフトであると認識し、農業生産のしくみを自然界の物理的秩序として説明しようと努力し、ヒュームやスミスらは、ニュートンの自然哲学にみられる観察・経験を通じた一般原理の発見を、市場のしくみの解明に応用した。こうしてその後の経済学の発展の基盤となる古典派経済学の形成へと続いていくのである。

以上のように、ポリティカル・エコノミーが18世紀後期に科学として形成される背景に自然法（哲）学の思想および自然誌の普及が相互補完的に作用したことは、その後の経済学における「自然」概念および市場の（自然的）秩序に関する理論的発展をみるうえで留意しておかなければならない。

次にアダム・スミスの自然的ヴィジョンについて見てみよう。そのためには、まず『国富論』に先立つ『道徳感情論』での人間観を踏まえておく必要がある。

Foley [2006] はスミスの著作の重要な特徴が、信念と信条の議論にあるとしているが、それは経済学的思考法が価値規範を伴っているという意味での信念と信条であり、他方でBakan [2006] は、法哲学あるいは道徳哲学の軸となる「公平な観察者」や「同感（共感）」と言った概念を用いてスミスが言わんとしたのは、人間の行動に見られる善悪の理由を説明しようとしたのではなく、善悪を判

断する感情がどのようにして生まれるかを説明することであったと言う⁴⁾。スミスの自然思想からの影響は、このような価値規範や善悪の判断といった人間の本性に根差すものに及び、その中心的概念が「利己心」もしくは「自己愛」である。スミスを批判的に読み解こうとするFoley [2006] は、利己心は市場の存在・機能を正当化するのに作用し、そうであるがゆえに、道徳上の問題としてのさまざまな資本主義の矛盾、たとえば貧困や不平等や環境問題など、そうした物質的豊かさの創造と同時に創出する問題を曖昧にしてしまうという「スミスの誤謬」を展開する。スミスの利己心が、このように解釈によっては、ある時は経済秩序を保つ原動力となる要因として、またある時は秩序を乱す要因となっていることについては、スミスの利己心をより詳しく見ていく必要があるが、それについては後述することにして、何を意図して「自然」という用語を用いていたかを問題としよう。

利己心を備えた人間の感情の動きに注目することから、スミスは自然的ヴィジョン、つまり普通に観察される状況において「自然的なもの」を見出そうとしたとされるが、それは「本来あるべき姿」や「本来の在り方」をさし、和田 [2010] はスミスの言う「自然的」な意味を、①そこら中に普通に存在するもの、②当然そうあるべきもの、③歴史のどの段階でも普遍的なもの、④永久不変的なもの、の4つを挙げている⁵⁾。経済のあるべき姿としての自然的経済秩序もこの方向へ向かうもので、重商主義批判の基準も、この自然的基準である資本投下の自然な順序、すなわち、経済は農業、製造業、国内商業そして外国貿易という順序で投資がなされるべきであるという基準にあり、重商主義はこの自然の順序に反しているとして批判する⁶⁾。

以上のように、スミスを含めポリティカル・エコノミーは18世紀の自然法および自然誌の影響を受けたことから、人間本性の観察がその基礎にあり、「自然」概念は一種の規範的概念として捉えられていること、また、科学の発展に倣いつつ経済の探究においても、社会科学および自然科学の両側面からより科学的な学問分野として誕生したことに、今日の経済学の起源を見ることが出来る。こうした経緯により、規範的であることはpoliticalに表出されているように、経済の自然的秩序のための政治的、制度的・政策的な社会のしくみの探究をも含意しており、今日では「ポリティカル・エコノミー」という用語は、そうした意味合いで用いられている⁷⁾。

1.2 「自然」概念と自由

スミスの重商主義批判にある「自然的」の意味からして、当然そうあるべき歴史的必然性のアイデアが、スミスの経済理論的ヴィジョンを「自然的自由の体系」に導いたと、和田 [2010] は指摘する⁸⁾。ポリティカル・エコノミーの背景にある自然思想上の成果として、18世紀には、自然の権利として財産権や個人の自由が善きものとして掲げられ、個人の権利が強調されるようになる。スミスら専門家としての経済学者、あるいはナチュラリストらは、個人の利益と公共の利益の調和という問題を課せられ、これについて適切な科学的根拠を与えたのが、まさに彼ら経済学者たちであったと、ケインズは指摘する⁹⁾。さらに言うならば、スコットランド啓蒙学者の典型ともいえるスミスこそが、「経済という新しい科学を彼の道徳哲学体系のなかにくみこむ」ことによって、それまでのホブズに見られる「自己保存とその結果としての戦争状態との矛盾を克服したのであった。」¹⁰⁾「自然法的作用によって、個人が自由な状態において光明に照らされながら、彼ら自身の利益を追求するとき、つねに、全体の利益をも同時に増進させることになる」と想像してみたまえ!¹¹⁾。スミスの「肉屋や酒屋やパン屋の自愛心」の例をあげるまでもなく、こうした個人の利益と公共の利益との調和のための必要条件が「自由の確保」であり、自由放任（レッセ・フェール）の原則が科学的根拠として与えられると、自由な経済活動、自由な交換は経済学的教義として善きものとみなされ、他方で政府の干渉が不要、さらには有害であるとして批判の対象となっていく。

1.3 理想的状態としての自然状態

当然、自由の確保によって経済活動が利益を生み出すようになると、自由な競争が促進される。もっとも、スミスの競争原理は、相手を負かすための競争ではなく、後に詳しく述べるように、他者の領域を侵さないという意味での共存共栄的な競争である、という解釈もあるが、いずれにせよ競争の結果、経済は本来あるべき自然状態へ向かっていく。

経済学者が自然法から導いた経済活動における自由の確保、すなわち自由放任という自由主義思想は、私利と公益の調和のための条件として、後には市場の調整メカニズムの機能のための条件として、揺るぎない科学的根拠として普及していく。そうした条件が整えられることで行き着く最終的な経済の状態、すなわち自然な経済状態とは理想的な状態であり、現実の状態が今現在そうでなかったとしても、そうあるべき理想の状態として規範的な概念なのである。これを根岸 [2007] は、現代経済学における長期均衡の状態に他ならないとしている¹²⁾。

個人の自由が当然そうあるべきものとして、また普遍的かつ永久不変なものとして「自然的」であれば、自己の利益を第一の目的とする人間の行動は、今日の経済理論における合理的経済主体の効用および利潤の最大化行動に通じるものであるが、ポリティカル・エコノミーが社会科学的観点から人間の本性の探究を試み、さらに自然科学としての地位を重視していく中でより抽象的な経済モデルへと発展していく経緯において、経済主体の捉え方それ自体も抽象化されていった。スミスの人間観にある「同感」や「公平な観察者」に見られるよう、元祖ポリティカル・エコノミーが捉えた経済主体はより深い人間理解に基づいており、より複雑かつ内容豊かなものであった¹³⁾。社会科学としての経済学と自然科学としての経済学との分岐点は、こうした区別をあえてするのであれば、数学的手法の利用以前にこのような人間の扱いの違いにあるといえよう。

理想的状態としての自然状態が、自然思想の下での人間観を大前提として達成されるものであるという認識は重要である。なぜなら、人間観をよそにその後のより科学的な装いをした経済学では自然思想の浸透がないまま「自然」という用語だけが、ただ独り歩きしていくことになるからである。また、和田 [2010] が指摘するように、「自然」についてミルは (J. S. Mill) は、「自然」は可変的であり、したがって制度や社会それ自体も人為的に変更可能であると、スミスと異なる自然観に依って立っており、自然観それ自体がさまざまであり、より自由に捉えられるようになっていく。ミルの時代には「経済学」の用語として、「自然的」という用語は次第に使う必要のないもの、あるいはむしろ使うべきではないものになっていく¹⁴⁾ というのであるが、到達点としての本来の自然状態が、理想的状態を意味するということが次第に曖昧となり、理論上の「均衡」状態に取って代わられるのには、こうした経済学の発展過程における変遷あるいは進歩があったといえよう。

2 現代経済学における「自然」理論の展開

2.1 スミスの自然価格理論と「見えざる手」

自然法思想の影響を受けたアダム・スミスは、自然の秩序に則った社会秩序の形成を、「見えざる手」の導きによるものとする。以下、スミスが『国富論』で展開した自然価格理論を、『道徳感情論』におけるスミスの人間観を踏まえて見ていこう¹⁵⁾。人間の本性について説いた『道徳感情論』では、「賢さ」と「弱さ」の両面を併せ持つ人間が、「公平な観察者」の目を意識しつつ同感（共感）を感じながら、自然の摂理の「見えざる手」に導かれて行動することで、人間の意図に沿ってというよりも「自然」によって意図されたものとしての社会秩序が形成される。また、『国富論』では、国民の富の増大が自然の原理に従った経済発展によってもたらされることが示される。個々の利益追求を目的と

した経済活動は、市場における「見えざる手」に導かれて、個々人が意図したのではない公共の利益をも達成する。つまり市場原理は、もともとスミスの「自然」の理解・解釈に基づくもので、その背景には自然の原理に依拠した自然的秩序の思想がある。岩井 [1987] は、このスミスの「見えざる手」の働きの発見こそが「経済学を経済学として成立させた」¹⁶⁾ として、その後の経済学の実証はこの市場原理、すなわち価格調整メカニズムの機能に関するものと指摘する¹⁷⁾。

さて、スミスの自然思想は、自然率や自然価格という概念でもって経済理論に反映される。まず、富を創造する生産の原動力となる資本蓄積に関して、資本の投下は「自然の順序」でなされるのが富の自然的進歩のプロセスであり、分業によって生産された生産物の交換の場が市場である。生産要素の報酬、つまり賃金、利潤および地代は、生産が行われた各部門間を生産要素が自由に移動できるという前提のもと、実際の生産の結果、自然率に落ち着く¹⁸⁾。そして生産物の自然価格は、賃金、利潤、地代の自然率によって構成される価格である。これに対して市場価格は、市場の需要と供給によって決定される。市場価格と自然価格が一致していない場合、たとえば市場価格が自然価格を上回るとき、賃金、利潤、地代は自然率を上回っており、この場合にはより高い報酬率が得られているので、この商品が生産されている部門へ他部門からの要素サービスの移動が生じ、市場価格および生産要素の(市場の)報酬率は下がる。逆に、市場価格が自然価格を下回っている場合も同様である。こうして市場価格は自然価格に一致する傾向をもつのであり、ひとたび両者が一致すると生産要素の部門間の移動はなくなり、自然率に落ち着く。この自然率は今日の経済理論における長期均衡をイメージしそうであるが、「見えざる手」が経済の自然状態を導くための機能であることをより深く理解するには、スミスの自然的ヴィジョンに基づいて人間の本性を理解する必要がある。

交換の場としての市場への参加者は自己利益を求めており、ここでスミスの「利己心に従って」というフレーズが、その後ひとり歩きすることになるのであるが、需要者・供給者という市場参加者は、『道徳感情論』で論じられる「心の平静を求める」人間であり、その本性は利己心だけで行動しているのではなく、利己心や自愛心は内に潜む「公平な観察者」の目の助けによって制御される。市場は本来、人間の生存をより確かなものにするための、互恵的行為としての交換の場であった。市場の発達によって人々の利益の増大が目的化すると競争が生じるが、競争は本来「互恵の質を高める」¹⁹⁾ 機能をもち、そのためにはフェアな市場でなくてはならない。また、スミスに従うならば、自由な経済活動という場合の「自由」とは、互恵を利用する自由である。この自由を手にした市場参加者としての人間は、程度の差はあるにしても、同感や公平な観察者の目や、自制心などを備えた、いわば複雑だが感情豊かな人間である。

スミスの「見えざる手」は、経済社会を本来あるべき自然な状態へ導くための調整機能であり、市場では報酬の自然率と自然価格を導くための調整機能として作用する。利己心が自然状態を導くという、ただそれだけでは正当な根拠をもたないわけで、それは「神がかり的なもの」として古典派経済学への批判の対象ともされてきた。要するに、自由も競争も、スミスの人間観に依って立つ人間が大前提なのである。

さて、スミスの「自然」概念に注目する際、忘れてならないのが、彼の重商主義批判の根拠である。スミスは当時の重商主義を、貨幣(金・銀)を富と同一視して、貨幣それ自体を増大させるために貿易黒字を生み出す政策であり、それによって利益を得る人々のものであると批判する。本来、資本の投下は自然な順序(農業、製造業、外国貿易)の順序でなされてこそ、経済は自然な発展を遂げ豊かさ(富の増大)も最も早く増していくものであるが、重商主義は貨幣の獲得のために、必要な消費財の生産ではなく、外国貿易を優先させている点、自然の原理に反している。また、交換手段でしかない貨幣を富とみなすことは、「豊かさの増進」という視点からの外れである。貨幣を富と錯覚

することの上に築かれた重商主義的政策は、「称賛されるものを称賛に値するものと錯覚する「弱い人」の経済政策であると言える。」²⁰⁾ いわゆる古典派の貨幣論（二分法）が重商主義批判の二つ目の根拠であるが、貨幣問題としての「貨幣ヴェール観」は、実はスミスの自然理論と同値の定理として、現代の経済理論に持ち込まれることになる。ここで強調しておくべきは、スミスの貨幣錯覚の議論が、スミスの人間観からすると、「弱い」人間の現れであり、「人類全体の繁栄という視点から見れば……まったく愚かなこと」²¹⁾ だということである。

2.2 ヴィクセルの自然利子率と貨幣の問題

スミスの自然率は、現代の経済理論における長期均衡の状態であり、そこでは新古典派経済理論における「貨幣の中立性」という命題が理論構成に反映されている。以下では、スミスの時代から100年後の19世紀における経済理論の発展過程において、新古典派経済学者としてスミスの「見えざる手」に疑問を呈したヴィクセルの不均衡累積過程の理論について、「自然」概念と貨幣の問題を整理しておこう。

岩井 [1987] によれば、19世紀後半のスウェーデンにおいて、「リカードを学問の師とあおぐ忠実な新古典派経済学者」としてのヴィクセルは、1893年の最初の経済学の著書において「実物」経済における分析を一応完成させた²²⁾。リカードはスミスの著作に見られる曖昧さや欠陥などを許さなかったとされるが、彼こそは「一つの体系的な理論を築き上げた」古典派経済学の完成者である、と根井 [1998] は評する²³⁾。ヴィクセルの『価値・資本および地代』における分析で登場するのが、実物資本の予想収益率としての「自然利子率」である。自然利子率は経済の実物的要因によって決まるもので、後に自然失業率仮説を唱えたフリードマンは、自然失業率の定義がヴィクセルの自然利子率に関係していると述べている²⁴⁾。ヴィクセルの自然利子率に見られる「自然」概念がスミスの「自然率」を含意し、後のフリードマンの「自然失業率」への橋渡しをしていると解釈することもできるが、岩井は、ヴィクセルの「不均衡累積過程の理論こそ、アダム・スミスの「見えざる手」に対する最初の根源的な理論的挑戦であった」²⁵⁾ としている。いったい「見えざる手」の何に対する挑戦なのであろうか。岩井によると、新古典派経済学者としてのヴィクセルが貨幣の二分法に不満を抱いたことから始まったという。二分法は、スミスの重商主義批判の根拠ともなった古典派にとって重要な命題である。ヴィクセルは貨幣によって購入される財の需要と、財の生産の供給（販売）によって貨幣が獲得されるという交換によって、価格が変動するとき、全体としての総需要と総供給の不均衡な状態は一時的ではなく継続的に価格に影響を与え、いわゆるマクロ経済の均衡に収束するのではなく、そこから離れようとする不均衡累積過程が生じることを示した。彼が明らかにしたのは、総需要と総供給の間における自己調整機能の欠如であり、均衡が本来の姿ではなく、不均衡が常態となる世界である。岩井は、この発見は、「市場における価格の自動調整機能、すなわち「見えざる手」に対する信奉を根本から揺り動かすものであった。」²⁶⁾ として、ヴィクセルのこの不均衡累積過程という不均衡状態も均衡状態と同様に「本来のあるべき姿」であるとみなさなければならないという意味で、これは一つの革命であり、これによって、「経済学ははじめて目的論的な先入観なしに不均衡現象を分析する科学としての可能性をもつことになった。」²⁷⁾ と評している。そしてこの不均衡累積過程の理論によって、価格調整機能の欠如を指摘したのに加えて、物価の変動が貨幣量の変化からくるのではないという、ヴィクセルが不満を抱いた「貨幣の二分法」をも覆すこととなった。

経済の自然な状態を表す用語としての自然価格や自然率という「自然」概念は、より科学的な理論としての新古典派経済学においては「均衡」概念を、より正確には長期均衡を含意するものとして洗練されていくのであるが、以上述べたようにヴィクセルの不均衡累積過程は、古典派・新古典派理論

の均衡理論と貨幣数量説という2つの命題に対抗するものであった。ケインズが経済の「理想」の状態と「現実」の状態の違いを強調したように、ヴィクセルの挑戦も、既存の命題に縛られることなく、より現実の経済の様相を説明しようという試みから生じたといえよう。

この古典派・新古典派の命題への対抗は、「見えざる手」が存在しないというものではなく、むしろ「見えざる手」は経済の自然状態、つまり均衡状態が仮に存在したとしても、経済をそこから乖離させるように機能するという、経済の不安定性の問題を突きつけたともいえる。「見えざる手」はここへきて、本来あるべき自然の秩序を乱す装置、さらには暴走する装置となる可能性を呈しているのである。

2.3 フリードマンの自然失業率仮説

ヴィクセルの理論は、その後のストックホルム学派の形成やイギリス・ケインジアン派の貨幣理論に影響を与えたものの、ケインズ革命以降はアメリカを中心とした新古典派総合やマネタリズム、合理的期待学派の台頭により、ケインズ経済学とともに「その権威をまったく失墜してしまった」²⁸⁾ かのようであったが、古典派・新古典派の流れを継ぐマネタリズムの自然失業率仮説は、その「自然」概念をヴィクセルの自然利子率から応用している。

自然失業率それ自体は労働市場の構造的要因によって決定される均衡失業率で、人々の期待が満たされる（現実のインフレ率と期待インフレ率が等しい）ときの失業率である。ヴィクセルの自然率に関係しているのは、経済の実物的要因によって決定される点である。また、ヴィクセルが自然利子率を用いて不均衡累積過程からインフレ・デフレ現象を説明しているのと同様に、自然失業率仮説も失業とインフレ率の関係を説明する理論である。違いは、自然失業率仮説が、ヴィクセルのような不均衡状態を常態とみなすのではなく、ワルラスの一般均衡理論体系を基礎として、均衡理論的アプローチをとっていることである。インフレ・デフレ現象を説明する自然失業率仮説は、経済が期待の実現によってそこへ向かうという調整機能を備えているという前提の下、それがひとたび達成されると、経済は自然率からシステマティックに乖離する傾向にはないという意味で、マクロ経済の定常状態均衡である。このように、ヴィクセルの不均衡累積過程に対して、自然失業率仮説やその後の合理的期待仮説などの新しい古典派の自然率は、元祖古典派に見られるような調整メカニズムを経て経済が落ち着く先の状態としてモデル化されている。さらに、自然失業率仮説それ自体は、長期の垂直なフィリップス曲線において、古典派的な均衡状態を示す重要な命題である「貨幣の二分法(貨幣の中立性)」と同義である。ここへきてフリードマンは、ヴィクセルが疑問を呈した「貨幣の二分法」を、ヴィクセルと同様にインフレ・デフレを説明する際にみごとに復活させたことになる。

「自然」概念は、正統派とされる古典派・新古典派、さらには新・新古典派によって、マクロ経済が理論的に定常状態としての均衡状態に達することを示すに至った。

70年代から80年代以降の「新しい古典派」あるいは「新・新古典派」の新しさとは、元祖古典派の自然思想に基づく経済学、すなわち自然的秩序の体系としての経済学を、自然概念から均衡概念を中心に据えるとともに、期待や外生的ショックなど、より新しい視点を取り入れることで、科学的に洗練された理論体系でもって経済モデルを示しているところにあるようである。フリードマンの自然失業率は、長期的均衡とはいえ、労働市場の構造的要因に依存しているため、自然失業率それ自体は可変的であるし、経済構造の変化を重視する場合、外生的ショックという要因は、いわゆるマクロ経済の定常状態ですら変えることができるのである。このように長期均衡が変わっていくという発見は、すでにスミスが、その自然状態が社会全体の状況、つまり豊かか貧しいか、発展しているかによって異なると指摘しているように、実は新しいものではない。根岸 [2007] が解説するに、スミスの『国富論』における経済学は、自然状態、すなわち今日で言う単なる長期均衡へ収束するという経済モデ

ルの体系というよりも、不均衡な成長理論であり、しかも単なる静学的理論ではなく、不均衡動学的な成長理論であるという。

3 ポリティカル・エコノミーとグローバル経済

3.1 「見えざる手」の正体

今日の経済理論においてスミスの「見えざる手」は、市場経済を均衡状態、つまり理想的な経済状態へと導く有能なものとして引用される²⁹⁾。スミスによる「見えざる手」という発想は、すでに見てきたように自然的秩序の思想に基づいており、人間の生を支える生産活動の発展、すなわち分業・交換システムそれ自体が人間の人為的制度の発展としてではなく、「見えざる手」による結果であると理解されている。しかしながら、ここで実際に経済活動を行う経済主体としての人間に関する、いわば「人間観」も自然的思想の下で捉える必要がある。この点においてもスミスのいう「利己心」が「見えざる手」の原動力として強調されるが、スミスが『道徳感情論』で説いた利己心は、「公平な観察者」を内に秘め、同感（共感）意識を日常の行動を通じて感じる人間の利己心であり、行動の善悪も社会生活においてある程度、制御されたものである。当時のポリティカル・エコノミーにおける経済主体が、今日の経済主体にみる合理的経済人よりも、スミスの道徳哲学者としての視点からしてより豊かな内容であったことを今一度知ることは重要である³⁰⁾。18世紀において利己心は、スミスのいう富の源泉である消費財の獲得、したがって消費財の生産を促す原動力であり、それによって国は豊かになっていくという認識であったが、産業資本主義の発展は生産による実物財の生産拡大と、それを通じた貨幣の獲得に向けて、個人の利己心が突き動かされるようになる³¹⁾。また、古典派経済学における利己心（個人主義）は、私利の追求と公益の達成というバランスをはかるのに重要な役割を果たすというものであったが、経済的発展と金融技術の高度な発展により、ケインズの言う「貨幣愛」はよりいっそう貪欲さを増し、その獲得技術が革新的に進歩するにつれて、個人の利己心はというとスミスの想定するような制御力が弱くなる。なぜなら物質的資源の希少性、特に国内経済におけるそれはある程度理解できるとしても、高度な金融技術の下では「貨幣」の創造は無限の可能性があり人々の欲求を駆り立てるからである。また、グローバル市場の拡大は一層それに拍車をかける。

こうして「見えざる手」の原動力である利己心は、今日では、スミスが例示した肉屋や酒屋やパン屋のような自身の経済生活の充足というつつましい利己心というよりも、スミスが国富の源泉として否定した貨幣そのものを求める経済主体の制御されない利己心へと、明らかに変化しているとみるのが妥当である。今日のグローバル経済において、「見えざる手」がより豊かな経済社会へと導いてくれるのかを問うならば、制御された利己心の含意を今一度考える必要がある。利己心が制御されない場合、公平な観察者としての内なる他人の目は曇り、共感の感覚も鈍くなる。ここへきて、純粹かつ完璧な利己的個人が現れることとなる。実のところ、現代の経済理論が想定してきた合理的経済人は、方法論上は単純化されており、ある意味、制御されない純粹かつ完璧な利己心をもった経済主体である。その活動を原動力として、理論的には「見えざる手」が市場を通じて必ず長期的に均衡状態へ経済を導いてくれる³²⁾。今日的には自然状態というよりも長期均衡状態、あるいは定常状態であるが、この理論上の理想的状態に現実の経済を近づけるべく、制御されない利己心をもった個人の自己利益の追求を原動力とした「見えざる手」の機能が、現実の経済において奨励される。経済理論が教える思想はこうして絶大な影響力をもつのである。

そして、現実の経済において理論が奨励されるとどうなるか。先に言及したような、高度な金融技術の下では「貨幣」の創造は無限の可能性があり、それがグローバルに展開される場合には、現実の

経済においてはますます利己心は制御されなくなるであろう。それでも理論的には「見えざる手」が機能することが大前提としてあるが、実際には機能しないどころか「見えざる手」の正体それ自体がますます見えなくなり、世界的金融危機のように経済を広い範囲にわたって混乱に陥れるのである。Gorton [2010] は、歴史的に繰り返される金融パニックがどのようにして起こったのかを詳細に検証するにあたり、「見えざる手」をヒントに、2007年のアメリカにおける金融パニックと過去のものとの違いについて、金融全般、つまり金融システム・制度、金融機関が扱う業務および金融商品、それに関する知識などが「見えている (visible)」か「見えなくなっている (invisible)」かの違いであることから始める³³⁾。この違いは、スミスの言う「同感」意識がもてるかどうかの違いであると解釈することもできる。

経済秩序を形成する「見えざる手」の正体は、本来は人間の本性としての制御された利己心の相互の関係性であって、それは人間そのものである。さらに付け加えるならば、良好な相互依存関係性はスミスの言う「同感」が意識できる範囲のことであろう。秩序が人々の利己心によって、それを意図・意識しなくても自然と、あるいは自生的に形成され公益につながる調和が保てるのは、人間の創意工夫、勤勉や努力などがあってこそであり、そのために、自由でなくてはならないのである。

3.2 自由な経済活動と競争

物質的「豊かさ」の源泉を利己心に訴えるとき、個人の自由な経済活動が社会において認められていなければならないし、分業・交換のシステムが市場の形成を通じて発展してくると、利己心に基づく自己利益の追求のために他者との競争が生じる。スミス自身は、市場価格と自然価格について議論する際に、自由競争に言及しており、「独占価格はいつでも、売り手が獲得できる最高の価格である。これに対して自然価格、つまり自由競争による価格は、売り手が受け入れられる最低の価格、……事業を継続できる最低の価格である」³⁴⁾としている。

現代の経済理論では、基本的競争モデルでの自由競争といえば、規制のない、参入・退出が自由な完全競争市場の状態を言う。スミスの自由競争は、制御された利己心との関係においてどのように捉えられているのだろうか。井上 [2012] は、スミスの自由競争の意図とは、生産要素の自然率を回復すべく、資本を自由に移動させることで、「資本投下の自然な順序を回復させることにあった」³⁵⁾とし、スミスの「競争」概念がコンペティション (competition) であり、エミュレーション (emulation) ではないことを強調している³⁶⁾。スミスの利己心は、井上によれば、他人に不利益を与えないという意味で「自分の生業に専念する」ことである。他人の領域を侵すことなく自己利益の追求に専念することで、分業と協業の秩序が保たれるという。他人の領域を侵さないということは、互いにそうした同感意識を持っており、競争といってもここでのコンペティションは、自分の領域に専念することが強調されるという。もし専念することを怠れば利益は得られず、自然淘汰される。ここでいう自然淘汰とは、他者との凌ぎ合いによって利益を追求するというよりも、自分との闘いという解釈もできる。さらに井上は、スミスのこの「競争」概念が、今日の経済理論における完全競争の状態に相当するという。完全競争とは価格支配力を持たない企業が、自身の生産における利潤最大化の達成に専念することで、多数の参加企業の間で「競争力の完全同化」が生じている状態であり、そこにはスミ素的な意味でのコンペティションの性質があるとしている。

これに対して、現実の経済において推進される競争は、独占を避けつつ、既存の企業に対抗できる企業の参入を促進するような競争、つまりエミュレーション (emulation) の発想であるという。確かに今日のグローバル経済における企業の国際市場への進出は、「対抗する」とか「見習う」といったエミュレーションの意味合いをもっているとともに、自己の生業に専念するというよりも、他者に

勝利することが競争の目的であり、自己抑制どころか「容赦もなければ慈悲もない」³⁷⁾ 熾烈な競争である。

このように井上は、競争についてコンペティションとエミュレーションを区別し、スミスの意図した前者では企業の競争は同化し、いわゆる自然率、今日の経済理論的には長期的完全競争均衡状態に落ち着くよう競争が機能する「淘汰・抑制的競争論」であるとしている。他方で後者のエミュレーションは、1980年代以降の現代の競争論に見られる「競争力」という質が問われるものであり、この新自由主義的競争を、「模倣・促進的競争論」と呼んでいる³⁸⁾。

両者の区別から、今日のグローバル経済を考える際の重要なヒントを見出すことができる。ケインズが『自由放任の終焉』で指摘した競争のコストは、現実の経済で見られる競争の姿、つまり熾烈な競争による犠牲である。ケインズは古典派経済学者が理論の出発点とする自由競争の仮定は、単純化のためであるとはいえ、それによって結果として生じる自然淘汰が進歩をもたらすとしても、競争がなされる前提として、「最大限の努力を引き出す誘因としての私的な金儲けの自由に対して有効な機会が与えられ、しかも実に、その機会が必ず与えられる」³⁹⁾と想定されているという。それが、現実には全くそうではないことをケインズは問題とするのである。もっとも、ここでケインズがいう自然淘汰は、ダーウィンの進化論的弱肉強食がイメージされており、井上がいう新自由主義的なエミュレーションであるが、ここでの問題は、現実の競争の最終結果の便益だけがアピールされ、競争のコストが全く考慮されていないということである。ケインズが例として挙げている首の長いキリンと首の短いキリンが木の枝から葉っぱを食べるという競争において、負けた首の短いキリンの飢え、争いそれ自体からくる疲弊感、闘争本能むきだしの食欲さの醜さなど、これらを見過ごしてはならないとケインズは警鐘を鳴らす。実際に、他者に勝利するためのエミュレーションによってもたらされる便益は確かに否定しがたく、経済発展の原動力であるとしても、そうした競争がいわゆる「勝ち組」と「負け組」を生み、格差や無気力など、キリンの例と同様のことが、一国経済においてだけでなく、グローバルに、しかも豊かな国でも貧しい国でも普遍的に存在しているということである。競争のコストという場合、理論上想定されている競争（コンペティション）と現実に見られる競争（エミュレーション）の区別はなく、ケインズがそうであるように現実の企業間の競争を問題とするであろう。ここに、自然状態についての未熟な理解と同様に、競争についても理論的コンペティションへの理解が未熟なままエミュレーションが促進されることへの警戒が見て取れる。

重要なのは、理論的帰結としての完全競争均衡の現実への応用が、グローバル経済の展開においても無邪気に唱えられているということである。現実の経済での過酷な競争は、同化した競争ではなく、他者を打ち負かし勝利することであるにもかかわらず、競争促進の理論的根拠は、基本的競争モデルのもとで達成される均衡状態という理想的な状態が、競争によって達成されるということである。実際に繰り返し広げられる過酷な競争が何の疑いもなく、理想状態を導くという、そんな自由競争として認識されている。

3.3 レッセ・フェールの呪縛

先の「競争のコスト」についてのケインズの言及は、『自由放任の終焉』においてなされているものだが、ここでケインズは、自由放任（レッセ・フェール）がもともと王制と教会を打倒するために18世紀に考えだされた政治哲学としての教義であったにもかかわらず、当時のポリティカル・エコノミーにおいては自由貿易擁護に際して脚光を浴びたとして次のように注意を促す。「自由貿易というもっとも強烈な表現をもって、自由放任の経済学説が完全に表現されることになる。」⁴⁰⁾ といえ、アダム・スミスやリカードなどは自由放任の思想を教条的な形で示しておらず⁴¹⁾、自由貿易の政

治的キャンペーンや、功利主義者たちの影響、二流の経済学者たちの言辞などによって、「自由放任政策が正統派政治経済学の実践的結論であることが大衆の心にしっかりと植えつけられることになった」⁴²⁾ という。さらに、自由放任、競争、利潤追求という動機などを前提とした理論が、「あまりにも美しく、あまりにも簡単であるために、それらがあるがままの事実から導きだされたものではなく、単純化のために導入された不完全な仮説から導きだされたものにすぎないことなど、容易に忘れられがちである。……経済学者たちは、現実の事実の分析を後回しにするのである。なおその上に、単純化された仮説が、事実と正確には一致していないことを認めている多くの人々でさえ、それにもかかわらず、その仮説は「自然」であり、それゆえに理想的な状態を表すものであると結論づけている。」⁴³⁾

経済理論におけるこの理想的な状態を求めて、理論上仮定される自由な経済活動のための「自由」の確保は、現実のさまざまな自由化政策の論拠となっている。すなわち、自由放任は理想的経済状態を達成するための必要条件として、揺るぎない教義であると「経済学」が教えているのである。

1920年代の時点において『自由放任の終焉』でケインズが世に問うたのは、何だったのであろうか。一方で、ポリティカル・エコノミー以降の古典派経済学・新古典派経済学が、方法論的に単純化・抽象化していることそれ自体に対しての警鐘というよりも⁴⁴⁾、自由放任という教義が、自由貿易政策に見られるような、その正当な論拠となる経済学説として、権威ある経済学者でなくむしろ二流の経済学者によって一般大衆に普及したことへの懸念がある⁴⁵⁾。つまり、学説に依拠しているとみなされるがゆえに、ひとたびそれが教義として認識されると、それは疑うことなく絶対的教義として崇拜されるものであるということである。

他方で、ケインズの文章から真摯に伝わってくるのは、キリンの例に見られるように競争のコスト、つまり現実の経済で生じている競争によるさまざまな犠牲、弊害に目を向けるべきであるという、その重要性を強調していることである。

その上でケインズは、自由放任を終焉させるにあたって、いかなる政策をとるべきかについて、政府のなすべきことと、なすべからざることを改めて区別しなすことからは始める必要があると、自身の見解について詳細を最後に述べている。

ケインズの説得的な叙述は、物事の事実をありのままに見ることの大切さを教えてくれている。ケインズは少なくとも『自由放任の終焉』でスミスの学説それ自体を問題視しているわけではないが、20世紀半ば以降、ケインズの経済学が政府の役割を重視する学説として世に広まる中、それはスミスの「自由放任」説と対置されるようになった。ケインズが、スミスが「自由放任」という言葉を使っていないことにわざわざ言及していることから、スミスのような偉大な経済学者が安易に「自由」を唱えているとはケインズも考えてはいないであろう。ケインズが説得の対象としていたのは、専門家としての経済学者というよりも、一般大衆の間に広まった自由放任の呪縛を解くことがいかに必要であるか、一般大衆に向けてその重要性を訴えたかったのかもしれない。

4 おわりに

今日のグローバル経済の発展は、一国内経済における自由化の推進と、グローバル経済における自由開放政策なくしては起こりえなかった。それ自体は否定できないとしても、それと同時に現実起こっている問題、すなわちケインズが90年近くも前に警鐘を鳴らした競争のコストや、フォーリー (D. K. Foley) が懸念する資本主義の矛盾としての貧困や不平等などさまざまな不快な問題を、理想状態へ近づくための単なる一時的な特徴として片づけてよいとは思えない。資本主義経済システムが自由

や競争なくして機能しないことは承知の上で、ケインズは「自由放任」を懸念し、フォーリーは、現実の経済が安定的でも自己調整的でもないという事実を目を背けるべきでないと説く。スミスの学説についてはさまざまな解釈があり、本稿ではそれ自体を問題としているわけではないが、スミスの経済学が誕生した背景とその後の影響力からして、今なお多くの教えを読み取ることができよう⁴⁶⁾。250年あまり昔と、そして今と、貧困や雇用や経済成長など、理論の精緻化とは別の次元で我々の生活に関わる経済問題は、その在りようは大いに異なるとしても、基本的には同じである。たとえば根岸[2007]は、スミスの重商主義批判を解説する場面で次のように注意を促す。「スミスが、重商主義においては消費者の利益はまったく無視され、生産者の利益には非常に慎重な注意が払われていると述べている点には注意しなければならない。消費者の利益を無視した生産者のための重商主義的な政策の横行はスミスの時代からこの百年以上たった現在においても、けっしてなくなっていないからである。」⁴⁷⁾

すでに後戻りができないグローバル化の進行過程にあって、さまざまな経済問題が顕在化している以上、根本から再考すべきことがあるのではないだろうか。富や豊かさとは何なのか。経済システムはいわゆる理想的な自然状態へ向かっているのか。それ以前に、そもそも理想的な自然状態とはいかなるもので、果たしてそれが人間にとって「善き」状態なのか。効率的資源配分は何より優先されるべき経済問題なのか。こう問うてみなければならない。

今日でもなお、その使い方は多様であるとはいえ、経済学の分野のひとつとしてのポリティカル・エコノミーが経済問題に取り組み続けていることから、それらの問題が深刻さを増していくほど、それが担う役割への期待はますます高まってくるであろう。ケインズもフォーリーも、資本主義を制御するためのポリティカルな側面の重要性を強調している⁴⁸⁾。18世紀にポリティカル・エコノミーとして形成された経済学の誕生は、政治哲学や道徳哲学といった哲学の助けなしには起こりえなかったであろう。ポリティカル・エコノミーへの期待は、同時に、経済学と哲学の融合もしくは共働への期待でもある。Marciano and Runde [2004]は、その将来における役割の可能性について、次のように語る。今日の経済問題が広く一般の人々の生活に影響するにつれて人々の関心も高まり、さまざまな価値観や経済・社会観が生じるようになると、それこそが経済学と哲学の分野で議論する問題なのである、と⁴⁹⁾。これはまさに、かつて啓蒙思想の普及とポリティカル・エコノミーの形成の時代に見られた現象である。今日のグローバル経済システムの出現を、18世紀の産業革命に続く資本主義経済システムの出現と同様に、21世紀の新たな経済システムとして見るならば、経済学の新たな展開として「自然の成り行き」なのかもしれない。

果たして、今日のグローバル経済で生じているさまざまな問題にどう取り組んでいけばよいのだろうか。市場が拡大するほどに、また人々の無限の貨幣愛が続くかぎり、スミスの制御された利己心に期待することは困難である。また、経済が複雑かつ高度に発展するほどに、人々にとって経済現象それ自体が「見えない」、そして理解できなくなる。「見えざる手」の原動力である人間は「賢さ」と「弱さ」を併せ持っているとはいえ、実際には一般に流布する教義に惑わされやすい「弱い」存在であることを認識しなければならない。これからも「自然」は、現実の世界において、そして経済理論の世界においても変化していくであろう。そうだとすると、もっともらしい経済学の教義に疑問をもち、そして大衆に迎合することなく、まずは現実をよく見ることである。『自由放任の終焉』でケインズが訴えたかったのは、それである。

注

- 1) Drazen [2000] p. 3の注, 参照。
- 2) Cardoso [2004] 参照。
- 3) 以下, ポリティカル・エコノミーの起源については, Cardoso [2004] を参考にしてている。
- 4) Foley [2006] およびBakan [2006] 参照。
- 5) 和田 [2010] 第2章, 参照。
- 6) 根岸 [2007] は, スミスの資本投下の自然な順序, すなわち農業, 製造業, 貿易という順序が, 論理的矛盾を来しているとは指摘している。「しかし, この順序で投下される資本の生産性が低くなるというスミスの説明は, 生産物労働の量の大小, 地代のあるなし, 代金回収の速度の大小などに基づくばらばらなものであり, 相互に矛盾していて, まったく混乱しており, ぜんぜん説得的でない。……むしろ第二編の基本的な原理, すなわち「分業は資財の進展に応じてしか深化しない」という観点から統一的になされるべきであろう。資本蓄積が不十分であれば, 農業と工業の分業は不可能であり, 後者は前者の片手間的に行われる。資本蓄積が進んで初めて農業と工業の分業が可能になる。地域的な分業, 国際的な分業には, さらに大きな資本蓄積が必要になるということである。」p. 553。「なぜスミスがそうしなかったのかは, まさに『国富論』における謎である。」p. 565。
- 7) ポリティカル・エコノミーという用語は, 今日においては, 経済問題を扱うさまざまな分野で用いられており, 政治・制度・規制・法律・政策などとの関連において「ポリティカル」が充てられるようである。たとえば, Marciano [2004] は, 1950年代以降の制度分析を元祖ポリティカル・エコノミーの視点から捉えるべく new political economyとしての経済・社会制度分析へのアプローチを試みており, またDrazen [2000] は, 単に政治学と経済学が統合した形での「政治経済学」という意味合いでなく, より現代経済学的分析上の概念的・技術的ツールを用いる分析であることを強調すべく, 'new' political economyとしている。
- 8) 和田 [2010] p. 89。
- 9) Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 327。
- 10) 水田 [2009] pp. 440-441。Sowell [2006] も, スミスがヒュームとともにスコットランド人であることを強調しており, その他の古典派経済学者であるリカード (ユダヤ人), J. B.セー (フランス新教徒のユグノー出身) 等も同じく, 社会的関連においてマイノリティーであったことを, 古典派経済学者の特徴のひとつとして挙げている。
- 11) Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 327。ケインズはさらに続けて, 「それでわれわれの哲学上の難問は解決されてしまう。……したがって, 自由のために必要な諸条件を確保すべく, 自分の努力に傾注することができるようになる。政府にそれを干渉する権限はないとする哲学的教義と, 政府が干渉する必要はないとする神の声に加えて, 政府の干渉は得策ではないとする科学的論証が付け加えられたのである。この科学的論証は, ……まさしくアダム・スミスのなかに見出されるものである。」邦訳 [1981] p. 327。
- 12) 根岸 [2007] p. 555。
- 13) Davis, Marciano and Runde eds. [2004] のIntroduction参照。経済主体の概念について, 元祖political economyの父らが用いたものが, 現在のそれに比べていかに 'richer' であったかと述べられている。
- 14) 和田 [2010] p. 99。
- 15) 以下, スミスの2つの著者に見られる人間観については, 堂目 [2008] を参考にしてている。
- 16) 岩井 [1987] p. 20。
- 17) 岩井 [1987] は次のように述べている。「その後の経済学の「発展」といわれるものの多くの部分は,

この「見えざる手」の働きにかんする分析を、あるいは一般化し、あるいは精緻化することにあつたとしても言いすぎではなからう。」 p. 2。

- 18) 『国富論』第一編第七章「商品の自然価格と市場価格」において、自然率について以下のように述べられている。「労働の賃金と資本の利益には、業種ごとに通常で平均的な水準がある。」これが自然率である。「この相場は、一つには社会全体の状況によって、つまり豊かか貧しいか、発展しているのか停滞しているのか衰退しているのかによって、もう一つにはそれぞれの業種の性格によって、自然に決まっている。……こうした相場は、その時期その地域での賃金、利益、地代の自然水準と呼ぶこともできる。」邦訳, p. 58。スミスがここで、自然水準（自然率）が、社会の発展状況によって異なっているとしていることに注意が必要である。
- 19) 堂目 [2008] p. 164。
- 20) 同上, pp. 175-176。堂目は、『国富論』の目的は、この錯覚から人々を目覚めさせ、真の豊かさをもたらす一般原理に導くことにあつたと述べている。
- 21) 同上, p. 175。
- 22) 岩井 [1987] p. 5。
- 23) 根井 [1998] p. 55。
- 24) Snowdon and Vane [1997], 邦訳 [2001] 参照。フリードマンは、自然失業率の定義、およびケインズの完全雇用の定義について聞かれ、両方ともヴィクセルの自然利子率に関係していると思うと、インタビューにおいて答えている。
- 25) 岩井 [1987] p. 4。
- 26) 同上, p. 9。
- 27) 同上, p. 9。
- 28) 同上, p. 9。
- 29) フリードマンは、Friedman [1962] 邦訳 [2008] 第13章において、アメリカ政府が、いかに諸改革の成果をあげることができなかつた、むしろ弊害をもたらしているかを列挙したうえで、「なるほどアメリカは進歩を続けてきた。……しかしこれらはすべて、自由市場を通じて展開された個人の創意工夫や意欲の果実であつて、政府の施策はすこしも貢献しておらず、ただ邪魔しただけである。その邪魔を乗り越えられたのは、市場には新しいものを生み出す途方もない力が備わっているからだ。見えざる手が進歩をもたらす力は、見える手が退歩をもたらす力に勝つたのである。」と「見えざる手」の勝利宣言をしている。邦訳, p. 362。
- 30) 注13) 参照。
- 31) Keynes [1972], 邦訳 [1981] でケインズは、「すなわち貨幣愛こそが、富の増大にもっともよく適した方法で経済資源を配分する仕事のために利用されるのである。」(p. 329) と述べている。
- 32) 岩井 [1987] は、スミスの『国富論』から「見えざる手」を引用し、「ここでスミスのいう「見えざる手」とは、市場における価格の需給調整作用のことであるのは言うまでもない」とし、さらに、1970年代から80年代のアメリカ・ケインジアン対新古典派の論争について、経済学的思考の枠組みは共通しているものの違いは「見えざる手」の働きに関する事実認識の差であると指摘する。ここで言う経済学を支配している思考様式とは、「見えざる手」が純粹に働いた時に達成される状態を経済の「真実」の姿として規定し、われわれが日々経験している現実の経済の動きのそれを「不完全」なる現れとみなすものである」(p. 3)。
- 33) Gorton [2010] 参照。Gortonは、まさに「見えざる手」によって我々が金融パニックという平手打ちを被つたという認識から、何が実際に起こつたか、いかにして起こつたのか、そして中央銀行が何をしたかなど

を、詳細に検証していくことが重要であると述べている。

34) Smith [1776], 邦訳 [2007] p. 65。

35) 井上 [2012] p. 173。

36) 以下、スミスの競争についての考え方については、井上 [2012] を参考にしている。

37) 井上 [2012] p. 183。

38) 同上, pp. 194-195。古典派の競争の概念に関して、根井 [1998] がリカードの理論を解説する際に、以下のように述べている。「一国内においては資本はできるだけ高い利潤率を求めて移動していく傾向があり、—これがまさに古典派経済学の「競争」にあたるものだが、— その結果、各部門で均等の利潤率が成立するが、この考えを全世界に適用すると、……理想的な国際分業の原理が導かれる。」(根井 [1998] p. 27。)

また、井上のスミスの「競争」の解釈とは異なり、根井は古典派の「競争」が厳密には上記のような利潤率を求めての資本の可動性を意味していることを強調したうえで、「現代経済学でいうところの「完全競争」とは異なっている「競争」の結果、各部門間に均等利潤率が成立するが、この状態が古典派の「均衡」である。」(根井 [1998] p. 76) と述べている。

根岸 [2007] の解釈は、「シロス・ラビーニ (P. Sylos-Labini) が強調するように、スミスや古典派経済学者にとって競争とは参入の自由を意味する。参入が自由であれば個々の企業は市場を独占することはできない。」(根岸 [2007] p. 567) と述べている。もっとも、根岸の競争のイメージは容赦のない熾烈な争いで、スミスの価格理論が「動学的不均衡理論」であることを説明する際に、以下のように表現されている。スミスの分析は、「需要増加によりひきおこされた超過供給状態における企業間の血みどろの争いのなかから、犠牲者(破産者)を踏みつけて生き残った企業の供給する価格を問題にする不均衡分析なのである。」(根岸 [2007] p. 569)

39) Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 339。

40) Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 332。

41) ケインズ曰く、「自由放任という言葉は、アダム・スミスやリカードやマルサスの著作のなかには見当たらない。その「自由放任」思想でさえ、これらの著述家たちは誰ひとりとして、教条的な形では示していない。」邦訳 [1981] p. 333。

42) Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 334。

43) Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 340。

44) 古典派経済学の方法論については Sowell [2006] が、現代経済学の方法論的問題が古典派の時代にすでに生じ明らかとなったとして、論争点を①抽象化と現実、②因果に関する概念、③数学の役割、④科学的な要求度、⑤実践上の関わり、といった観点から整理し、古典派経済学者の方法論を批評している。それによると、スミスの方法論は折衷的であり、リカードはより抽象的かつ演繹的で、経済学をより科学的にしたと評している。ただし、何ををもって「科学的」とするか、また経済学が科学的であることの有効性は何かを問うことの重要性を指摘している。さらに、本稿で問題としているポリティカル・エコノミーの背景にある自然思想との関連で、Sowell [2006] は、「より広範な歴史的経験から判断するに、political philosophy (政治哲学) と economic methodology (経済学的方法論) との間には何ら必然性はなく、また実際にもほとんど関係性はない」と結論づけている。

45) ケインズは、一般大衆への知識普及過程を通して広まっていった自由放任という教義(思想)について、「ジョン・スチュアート・ミルの時代から、権威ある経済学者たちは、このような思想全体に対して強く反発してきた。」(邦訳 [1981] p. 336) と強調している。さらに、「正統派の経済学者としておそらく初めて、自由放任一般について正面から攻撃を加えた」ケアンズの「自由放任の格率は、なんら科学的根拠をもつ

ていない」という見解が、アルフレッド・マーシャルも含め、「この五〇年にわたって、すべての指導的経済学者たちの見解であった」（邦訳 [1981] pp. 336-337）としたうえで、しかしながらその見解が支配的になるまでに至っていないと述べている。

46) たとえば、スミスを批判的に読み解く Foley [2006] は、現在のグローバル経済における厳しい真相を理解するには、「スミスの誤謬の中にある架空の慰めを捨てることによつてのみ」(Foley [2006], 邦訳 [2011] p. 188) 可能であるとして、既存の教義への真摯な理解を促している。また、根岸 [2007] は、現代経済学の代表的経済学者であるサミュエルソン (P. A. Samuelson) が、古典派の理論を数理的モデルに再編して検討した結果、スミスの理論を最も高く評価していることから、「現代経済学が古典派経済学から学ぶことがあるとするならば、それはリカードウやマルクスからではなく、スミスから、その『国富論』からであるといえよう。」(根岸 [2007] p. 559) としている。さらに、Sen [2009] は、主流派経済学派が、スミスに倣って利己的な経済主体を想定しているというその偏狭さを批判し、スミスは人間行動を理解するうえで倫理を重要な部分とみなしていたことを強調したうえで、「このような間違つたスミス解釈」(Sen [2009], 邦訳 [2011] p. 277) に対して丁寧に修正を試みている。

47) 根岸 [2007] p. 554。

48) ケインズは、「資本主義は本質的に望ましいものなのか、好ましくないのかということについて論じたりしている現代よりも、もっと [結論が] はっきりとわかるような時代が近づきつつあるようである。私としては、資本主義は賢明に管理されるかぎり、おそらく、経済的目的を達成するうえで、今までに見られたどのような代替的システムにもまして効率的なものにすることができる」(Keynes [1972], 邦訳 [1981] p. 352) と、管理の必要性を指摘している。もっとも、それに続けて、「本質的には……好ましくないもの」であるため、問題は、満足のゆく生活様式に抵触しない社会組織を創り出すことであると述べている。Foley [2006] は、「資本主義の成長について実行可能で安定的な制度の確立には、政治の主導力・伝統的制度の市場システムへの臨機応変で忍耐強く持続的な順応・幸運のかかなりの力添えが、不可欠である」(Foley [2006], 邦訳 [2011] p. 189) としている。

49) Davis, Marciano and Runde eds. [2004] の Introduction 参照。

参考文献

- 早坂忠 編著『経済学史』ミネルヴァ書房、1989年。
 井上義朗『二つの「競争」』講談社現代新書、2012年。
 猪木武徳『経済思想』岩波書店、1987年。
 岩井克人『不均衡動学の理論』岩波書店、1987年。
 岩井克人『貨幣論』筑摩書房、1993年。
 喜治都「グローバル経済システムの持続可能性」『玉川大学経営学部紀要』第9号、2008年、pp. 23-47。
 喜治都「流動性の罫と金融政策 — グルーグマンとロジャーズの再解釈」『玉川大学経営学部紀要』第12号、2008年、pp. 93-112。
 小坂国継・岡部英男 編著『倫理学概説』ミネルヴァ書房、2005年。
 水田洋『アダム・スミス論集～国際的研究状況のなかで』ミネルヴァ書房、2009年。
 根岸隆「解説『国富論』と現代経済学」『国富論～国の豊かさの本質と原因についての研究（下）』山岡洋一 訳、日本経済新聞社、2007年、pp. 549-572。
 根井雅弘『経済学の歴史』筑摩書房、1998年。
 和田重司『資本主義観の経済思想史』中央大学出版部、2010年。

- Atkinson, Anthony B. and Joseph E. Stiglitz, *Lectures on Public Economics*, McGraw-Hill, 1987.
- Boylan Thomas A. and Paschal F. O’Gorman, “Popper, Economic Methodology and Contemporary Philosophy of Science”, in *Popper and Economic Methodology*, edited by Boylan Thomas A. and Paschal F. O’Gorman, Routledge, 2008, pp. 5–32.
- Buchan, James, *The Authentic Adam Smith; His life and Ideas*, W. W. Norton & Company, 2006. (山岡洋一訳『真説 アダム・スミス その生涯と思想をたどる』日経BP社, 2009年)
- Cardoso J. Luis, “Natural Law, Natural History and the Foundations of Political Economy”, in Davis, John B, Alan Marciana and Jochen Runde, *The Elgar Companion to Economics and Philpssophy*, Edward Elgar, 2004, pp. 3–23.
- Drazen, Allan, *Political Economy in Macroeconomics*, Princeton University Press, 2000.
- Foley, Duncan, *Adam’s Fallacy; A Guide to Economic Theology*, The Bolknep Press of Harvard University Press, 2006. (亀崎澄夫・佐藤滋正・中川栄治訳『アダム・スミスの誤謬 経済神学への手引き』ナカニシヤ出版, 2011年)
- Friedman, Milton, *Capitalism and Freedom*, University of Chicago Press, 1962, 1982, 2002. (村井章子訳『資本主義と自由』日経BP社, 2008年)
- Friedman, Milton, “The Role of Monetary Policy,” *American Economic Reviews*, March, 1968. 新飯田宏訳『インフレーションと金融政策』所収, 日本経済新聞社, 1972年)
- Gorton, Gary B, *Slapped by the Invisible Hand : The panic of 2007*, Oxford, 2010.
- Groenewegen, P. “ ‘Political Economy’ and ‘Economics’ .,” in J. Eatwell, M. Milgate and P. Newman eds., *The New Palgrave; A Dictionary of Economics*, vol. 3, The Macmillan Press Limited, 1987, pp. 904–907.
- Hausman, Daniel M. and Michael S. McPherson, *Economic Analysis and Moral Philosophy*, Cambridge University Press, 1996.
- Keynes, J. M, *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume IX , Essays in Persuasion*, The Royal Economic Society, The Macmillan Press, 1972. (宮崎義一訳『ケインズ全集 第9巻 説得論集』東洋経済新報社, 1981年)
- Keynes, J. M, *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume IX , Essays in Persuasion*, The Royal Economic Society, The Macmillan Press, 1972. (山岡洋一訳『ケインズ説得論集—自由放任の終わり』日本経済新聞社, 2010年)
- Lux, Kenneth, *Adam Smith’s Mistake*, Shambhala Publication, 1990. (田中秀臣訳『アダム・スミスの失敗』草思社, 1996年)
- Marciano, Alan, “The Historical and Philosophical Foundations of New Political Economy”, in Davis, John B, Alan Marciano and Jochen Runde, *The Elgar Companion to Economics and Philpssophy*, Edward Elgar, 2004, pp. 24–41.
- O’Brien, D. P, “Classical Economics,” in *An Encyclopedia of Macroeconomics* edited by Brian Snowdon and Howard R. Vane, Edward Elgar, 2002, pp. 129–133.
- Phelps, Edmund S, *Seven Schools of Macroeconomic Thought*, Clarendon Press, Oxford, 1990. (平山朝治訳『E. S. フェルプス マクロ経済思想 七つの学派』新世社, 1991年)
- Schulze, Gunther G. *The Political Economy of Capital Controls*, Cambridge University Press, 2000.
- Sen, Amartya, *The Idea of Justice*, Penguin Books Ltd, 2009. (池本幸生訳『正義のアイデア』明石書店, 2011年)
- Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, 1759. (米沢富男訳『道徳情操論』(上下) 未来社, 1969年, 1999年), (水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房, 1973年)

- Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776. (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』(全5冊)岩波書店, 1959年), (山岡洋一訳『国富論～国の豊かさの本質と原因についての研究』日本経済新聞社, 2007年)
- Snowdon, Brian and Howard R. Vane, *Conversations with Leading Economists; Interpreting Modern Macroeconomics*, Edward Elgar, 1997. (岡地勝訳『マクロ経済学はどこまで進んだかー トップエコノミスト12へのインタビュー』東洋経済新報社, 2001年)
- Sowell, Thomas, *On Classical Economics*, Yale University Press, 2006.
- Thompson, John L, “Natural Rate of Unemployment,” in *An Encyclopedia of Macroeconomics* edited by Brian Snowdon and Howard R. Vane, Edward Elgar, 2002, pp. 515–518.
- Tobin, J. “The Natural Rate as New Classical Economics.,” in R. Cross ed., *The Natural Rate of Unemployment: Reflection on 25 years of Hypothesis*, Cambridge University Press, 1995.
- Walter, Andrew and Gautam Sen, *Analyzing the Global political economy*, Princeton University Press, 2009.

(きじ みやこ)

Review of the Concept of Nature in Economics

Miyako KIJI

Abstract

Modern economics has been shown that the free economic activities and the competitive markets can make the efficient allocation of resources possible by incentives that economic agents perform the maximization of their interests. In the last decade of the twentieth century, a global economy emerged by the end of the socialism of Soviet Unions and the principle of free and competitive markets have been promoted in the world. We can see the growth of the global economy, shown in the number of the rate of growth of GDP especially in the emerging countries, but it seems that we also now face at several economic problems of the world, which are for example the shortage of resources and food, the destruction of natural environment, poverty, and so on.

About 250 years ago, Adam Smith tried to study the nature of human beings and the economic system of markets on the basis of the ideas of natural law and natural order. And he also recognized that the world was uncertain and we could see some unexpected events by the foolishness and unfairness and the weakness of human beings.

This paper studies the several effects of the principles or doctrines in modern economics that has given us focusing on the concept of 'natural' since the age of Adam Smith.

First of all, I show the process of the formation of political economy that emerged in eighteenth century on the basis of natural law and natural history. And in section 2, I trace the definition of 'natural' starting from the natural price or natural rate by Adam Smith to the natural rate of interest by Wicksell and the natural rate of unemployment by Friedman in modern economics in compared with Smith's.

Then in section 3, I examine how to be explained the words of 'invisible hand' and competition, and *laissez-faire* as the doctrines in modern economics, which are important concepts in market economy, since the age of emergency of the original political economy until now.

And in the last section, I refer to an important question about the ideas of modern market economy, that is to say, how to recognize the real economic problems from both of economic theory and real economic events. In other words, it is important to study at the point of philosophical foundations of political economy about if real economy is bound for the ideal natural economy state, and well what is the ideal economy, and whether it is really good and right. I conclude to say that the ideas of original political economy and the philosophical thinking are useful to help to solve the real economic problem in economics.

Key words: political economy, natural rate, invisible hand, competition, *laissez faire*